

台湾茶の歴史を訪ねる 第十四回

(14) 東台湾 その茶と歴史とは

須賀 努 (コラムニスト／茶旅人)



台湾の太平洋に面した東海岸は、清朝時代には『後山』と呼ばれており、現在の宜蘭、花蓮、台東の台湾東半分を指していた（現在は縮小され、花蓮、台東の2つだけとなっている）。そこは台湾西部から見た裏山だったということで、元々は原住民の居住地だったが、そこに漢人の開拓が始まり、日本統治時代には日本移民も開拓のために入植した。

この後山では一体いつから茶業が始まり、どのような発展過程を経て、現在の蜜香紅茶や紅烏龍茶が生まれたのか。その知られざる歴史にスポットを当てるため、台湾環島（台湾一周）の茶旅を敢行したので、ご報告したい。

宜蘭茶の歴史

台湾茶の世界では東部でなく北部に属する宜蘭（茶業改良場では宜蘭は台東分場ではなく文山分場が担当している）だが、同じ太平洋に面していること、そしてこれまであまり茶の歴史が語られてこなかったこと、また清朝時代の後山であることを勝手に考慮して、今回合わせて取り上げてみることにした。

宜蘭茶の歴史は日本統治時代初期に始まると、当時の新聞の記事で読んだ記憶があり、それをもとに、宜蘭に向いて、その真偽を尋ねてみた。訪ねた先は宜蘭県茶商公会の游斉民理事長と茶農家の皆さん。その答えは『1885年頃には宜蘭の礁溪にはすでに茶畑があった』というもので、少し驚く。

何故 1885年なのだろうか。一つの考えだが、その前年に清仏戦争があり、清朝では欽差大臣に左宗棠が任命され、福建沿岸の警備に着く。そこで注目された台湾を省に格上げして、劉銘傳が巡撫として送り込まれ、台湾の産業の一つとして茶の振興を計ったことと何らかの関係があるのではないだろうか。劉銘傳は綿、養蚕と共に茶業に力



宜蘭 宜蘭県茶商公会の皆さんと

を入れる政策を打ち出しており、また同時に原住民討伐を行っていることから、この関連性は考えうる。

標高 400m 程度の林美山、そこは清朝時代、初めに茶樹が植えられ、日本時代には一面茶畑だったと地元民は証言する。現在淡江大学と仏光大学がある直ぐ近くには、今も茶畑が僅かに残っており、周囲の林の中には、100年前の茶樹が僅かに見られた。初めは中国福建から武夷種が持ち込まれた様だが、品種も自然交配が進み、現在では様々な形の葉を見ることが出来る。山の上から茶畑を



宜蘭 林美山に残る茶樹

眺めると、向こうの方には広く太平洋が見える。

清朝時代には烏龍茶など部分発酵茶が作られていたと思われるが、日本時代初期には、緑茶を作ったのではないかと、との話もあった。既に台湾緑茶の歴史の中で述べたが、1908年に苗栗三叉河産の緑茶が台湾で売り出されており、同時期に各地で緑茶生産が試された可能性は否定できない。そしてその後すぐに、総督府が奨励した包種茶作りに切り替えられた可能性が高い。尚この時期既に基隆までの公路が作られており、茶の輸送はこの道を使っていたという。

日本時代の茶工場が残っていると云われたので、訪ねてみた。既に20年前にはその役割は終えていたが、そこには民国20年(1931年)に登録された(建てられたのは更に前)三民茶館が現存していた。ここに一人で住んでいる78歳の林信吉さんによれば、この建物は彼の父親が建てた物であり、往時は茶葉が大量に運び込まれ、包種茶や紅茶を生産していたという。1970年頃は一時煎茶生産も行われ、日本に輸出されていた。今でもドアや窓などに日本時代の面影があり、室内には揉捻機などが残されており、昔が偲ばれる。



宜蘭 日本時代に建てられた三民茶館

光復後、包種茶、紅茶、煎茶などを作っていた宜蘭茶業だったが、輸出が減少し、内需へ転換していくと、品種もそれまでの武夷、青心烏龍に加え、金萱が植えられ、『どんな茶でも顧客の要望に応じて作る』『機械摘み茶葉を使った茶作りでは一番』に変わっていったという。ここ20年は中国からの需要が増え、台湾茶の多くが宜蘭から輸出されているとの話もあった。宜蘭の人々は茶農家から茶商に転換した、とも言われる所以だ。

黄子誠さんは、1970年代に父親が始めた茶業を継いだ2代目。元々は武夷、青心烏龍などを植えていたが、近年は金萱が中心となり、鉄観音茶も金萱種で作っているという。2008年からは紅茶生産も始め、また有機栽培を取り入れ、有機王の称号も得ている。以前と比べれば、茶農家の数は減っているが、黄さんのような個性的な茶農家が、今後の宜蘭茶を支えていくのではないだろうか。

花蓮茶の歴史

今では蜜香紅茶で知られる花蓮だが、その茶の歴史は花蓮市内から車で1時間以上南下した瑞穗郷にある。ちょうどここには北回帰線が通っており、そのモニュメントの横には、土産物売りの軒の茶荘があった。その家こそが、第2次世界大戦末期に、新竹の竹東から移住してきた客家、黄



花蓮瑞穂 北回歸線



花蓮瑞穂 富源茶業 葉發善氏家族と

家の末裔だった。

現在の当主、黄武雄さんは『うちの祖先は一家で新竹からやってきたが、台北からこちらへは交通手段がなく歩きだった。途中台北や花蓮で職を見つけた者はそこに留まったので、各地に親戚がいるよ』と笑いながら話す。当時日本はこの地にコーヒーを植えていたが、技術や病気などの影響で、製茶技術を持つ客家をここに移住させたようだ。水尾という場所で青心烏龍、大葉烏龍などの試樹にも成功したが、戦争末期の食糧不足で、芋などに転作した。

戦争が終わった時、豊原の杜雪卿という人物が鶴岡の土壤、環境に目を付け、大葉種による紅茶製造を目論み、魚池から茶樹を持ち込んだ。だが、設備、技術、労働力の不足など、いくつもの要因が重なり、この試みは成功しなかった。尚杜雪卿がどのような人物で、なぜ鶴岡にやってきたのかは定かでない。現在豊原の杜家で茶業と言えば、泉芳茶荘が思い浮かんだが、杜雪卿について尋ねても、遠い親戚、という以外分からないようだ。

1958年国有財産局は鶴岡地区の国有地700ヘクタールを土地銀行に委託した。59年から土地銀行は魚池よりアッサム種などを持ち込み、1961年に鶴岡示範茶場を設立させる。1964年には『鶴岡紅茶』として売り出され、70年代も全世界に向

けて輸出されていた。ただ台湾経済が発展し、紅茶の輸出競争力は無くなっていき、1988年に鶴岡示範茶場は閉鎖され、文旦などが植えられ、人々の記憶からも忘れ去られていく。

一方瑞穂にはもう一つ、茶業の村があった。舞鶴台地がそれである。鶴岡、舞鶴、共に日本の地名なのが面白い。舞鶴で茶業が始まるのは1970年代の初めから。当時煎茶が足りない日本の需要に応えるべく、台湾政府がこの地で茶業を推奨する。それに応えて桃園龍潭から葉發善氏が茶作りのために舞鶴にやって来て、富源茶業を開く。葉さんの家は龍潭で祖父の代から茶業をしており、北アフリカ向け緑茶や紅茶などの豊富な製造経験があり、40歳で舞鶴行きを決断したという。

この時、農林庁から舞鶴開拓を託され、葉さんに同行したのが張瑞正股長（1976年の鹿谷優良茶コンテンツの審査員の一人）だった。張氏は農林庁勤務を始めた1958年から東部開発に関わっていた。『中興新村から、乗り物を乗り継いで瑞穂まで2日掛かった。そこまで行っても川に橋もなく、溺れそうになりながら自分で川を渡ったよ』と懐かしそうに話す。

『1973年に茶畑を整備して農林庁から茶苗が無料で配られ、茶作りが始まったが、何しろ交通があまりにも不便で、煎茶を作っても運ぶのに時間

が掛かり過ぎて、商売にはならなかった』と 86 歳になった葉さんは懐かしそうに語る。水も欠乏しており、原住民は茶業に関心を示さず、労働力も足りていなかったという。

煎茶は 1 年で止め、それでも努力して茶園を広げ、茶工場を立ち上げ、1976 年頃から青心烏龍や大葉烏龍などの品種を使った烏龍茶を作り始める。更には金萱などの新品種を使った半球形包種茶作りも始まり、この茶は南投県名間辺りに売られていく。因みにこの地区の茶は天鶴茶という名称で呼ばれているが、この名は台湾農業の発展に多大な貢献のあった銭天鶴氏から取られたものだという。

更に葉さんの所では、1990 年代に未発表の品種、台農 209 を使い、白茶の製造が試験的に行われ、現在では専門家も称賛する高品質の白茶を生み出している。昨今台湾でも白茶がちょっとしたブームとなっているが、『台湾で最初に白茶を作ったのは舞鶴の葉家』とも言われ、その先駆的な行動は、注目されている。

1980 年代に入ると、台湾茶の輸出は激減し、更には輸入茶葉の増加により、東部の茶業は収益が得られずに収量も減っていき、徐々に衰退していく。そんな中、1990 年代後半に、蜜香紅茶が生まれる。嘉茗茶園の高肇昫氏は当時、天鶴茶の販売

班長だったが、茶業改良場台東分場と協力して、ウンカの噛んだ茶葉の効用を利用して、初めは蜜香緑茶、ついで蜜香紅茶の商品化に漕ぎ付ける。既に東方美人茶があったので、それとの競合を避けて売り出されている。尚蜜香は一般名称のため、商標登録は出来なかったと聞く。

また高肇昫氏の夫人、粘筱燕さんは 9 人姉妹の 2 番目（双子の妹）であり、粘氏は満州族の末裔で、彰化から 1960 年代にこの地に移り住んだという。最初はパイナップル作りなどをしていたが、今ではその一族も茶業を行い、蜜香紅茶のコンテスト入賞の常連として、その発展を支えている。因みに高肇昫、粘筱燕両氏は夫婦で神農獎を受賞しており、二人三脚で日々茶の生産に励んでいる。

台東茶の歴史

花蓮から更に南に下ると台東に達する。少し小高い丘の上に、鹿野という街がある。この地は 1915 年に新潟から移民が来て開拓された日本人村であり、区画がしっかり整備されているのが、丘の上からはっきり確認できる。真新しい神社は、入植 100 周年の記念に地元が再建したという。

鹿野には『高台』と呼ばれる地区がある。

この名称は日本人が付けたものだろう。今その



花蓮瑞穂 嘉茗茶園の高肇昫氏夫妻と



鹿野 高台から街を見下ろす

地は観光客で賑わっているが、ここにも茶畑があり、茶を売る店がいくつもある。ただ日本時代、ここで茶作りが行われたという話は聞いていない。日本移民と茶は全く無関係だったと言ってよい。

第2次大戦末期、屏東潮州、大武郷、知本などに茶樹が試樹された様だが、戦況悪化で終了を余儀なくされたと聞く。光復後の1959年、茶業改良場の呉振鐸所長と林復魚池分場長（この2人は福建省福安農学校で同期生）が共に台東、花蓮を視察して、16か所に試験的に茶樹を植え、その後魚池分場として、瑞穂や美濃などに茶苗試験場を設置した。

1960年代に入ると台東政府も茶業に本腰を入れ始め、1963年に新竹関西で紅茶作りの経験がある温増坤氏が招かれてアッサム紅茶の生産が始まる。元々は知本で始まったが、工場設備の不足などにより、徐々に茶畑が広がっていた鹿野に舞台を移していく。1971年には新元昌製茶の茶工場が鹿野に設置された。

現在は観光客が大勢立ち寄る鹿野の名所、紅茶産業文化館で、2代目温氏から話しを聞いた。『この地に来た当初は何もなくて、苦勞の連続だったが、何とか紅茶作りを軌道に乗せた。1980年頃までは紅茶輸出が多かったが競争力がなくなり、そ

の後は包種茶など、色々なお茶を作った』と当時を回顧する。初期の鹿野は日本人が去った後、その空いたスペースに徐々に周辺住民が住み始め、更には西部から移民もやってきたという。労働力はそれなりにあったということだろうか。

ちょうど時代は輸出から内需へ向かっていた。北部はコスト増で茶作りは減少しており、坪林の茶商がここに来て、特に温暖な気候で栽培される冬茶を大量に購入していったようだ。金萱や翠玉と言った品種が植えられ始め、球形の包種茶が多く作られていくのは瑞穂と同じだ。李登輝元総統も1980年代にここを訪れ、当地の茶を『福鹿茶』と命名したともいう。

1984年には台東に茶業改良場の分場が作られ、茶業の東部開発に拍車がかかる。鹿野の茶生産は増加の一途を辿ったが、1990年代半ばには、陰りが見え始める。この地の茶農家は荒茶まで生産して、茶商などに売り渡すところが多く、特色を発揮する術がなく、市況に大きく影響されていたようだ。また茶業者に後継ぎがなく、高齢化による労働力不足も大きな問題となっていた。

そこで台東茶業の起爆材として期待されたのが『紅烏龍』だった。改良場によれば、2008年台東分場が推奨したのが始まりだという。だが周辺茶農家に聞くと、『ずっと以前から紅烏龍は民間で



鹿野 新元昌製茶にて



茶業改良場台東分場



タイ メーサローン 紅烏龍茶の製造

作られていた』と言い、どちらが正しいのか正直判定は出来ない。ただこの茶の名前が西部で聞かれ始めたのは、確かにこの10年のことではないだろうか。

『紅烏龍茶』は烏龍茶なのか、紅茶なのか。当初はそんなことが知りたくて、台東まで行ったこともある。台湾茶の名称の付け方からみれば、後ろに烏龍が来ているから分類上は烏龍茶なのは明白であった。ただ紅茶製造の手法を応用した、萎凋を強めに行う重発酵の烏龍茶（現在の台湾烏龍の中で発酵度は最も高く、水色は鉄観音より濃い）であり、従来紅茶生産が主流だったこの地に適し

ていたと言える。以前とは異なる特色あるお茶の生産に繋がっている。

ただ正直紅烏龍が台湾全土に浸透しているとは言い難く、あくまでちょっと目先の変わったお茶の一つという扱いを受けていることは否めない。それでも茶生産に熱心に取り組む茶農家があり、また新規参入組の中には、従来の手法を改良し、生産の機械化、効率化に力を入れて、業績を伸ばし、評価を得ているところもあった。

更にはこの台東の紅烏龍を先日タイ北部のメーサローンで見えて驚いた。4年程前台湾から機械と製法が持ち込まれ、生産が始まったという。この地は環境がよく、EUの有機認定を受けたこともあり、ここで作られた紅烏龍茶は高値でヨーロッパに輸出されている、との話まであった。台湾茶の海外発信が行われている。

今後紅烏龍は国際化していくだろうか。それとも飲料用に輸入されている茶葉などにとって代わるのだろうか。台東には茶業改良場の分場があることもあり、様々な試みがなされていると聞く。東台湾の茶業は総じて厳しい状況にはあるが、その困難を克服できる要素は持っていると言えるのかもしれない。